

付 属 資 料

プロジェクト概要		指標	指標の入手方法	外部条件
<p>プロジェクト名: ラオス国 児童に対する歯磨き指導による口腔内清掃状態改善事業(歯ブラシ一本から始まるお口の健康) 事業実施団体: 沖縄歯科口腔外科学研究振興会 カウンターパート: セタティラート病院歯科ユニット 所管: JICA沖縄 対象地域: ビエンチャン市内の小学校(ドンコイ・ボンババオ・ノンハイ小学校3校) 受益者: ドンコイ小学校児童(227名)を始め、ボンババオ・ノンハイ小学校(2校、約500人)児童、校長、保健の先生、親、地域住民、ラオス国立大学歯学部学生 期間: 2008年～ 3年間 予算: 9,991千円</p>				
【上位目標】 ドンコイ小学校での予防歯科指導体制確立がモデルとなり、ビエンチャン市シタナーク郡の小学校、ノンハイ小学校及び地域住民等の関係者がより適切に予防歯科に取り組むようになる。	1 ビエンチャン市シタナーク郡及びノンハイ小学校における予防歯科関係者(校長、保健の先生、親、児童、セタティラート病院歯科医師、ラオス国立大学歯学部学生等)の予防歯科の必要性にかかる認識が高まる。 2 同地域で学校歯科検診を行う開業医が増加する。 3 ラオス国立大学歯学部の実習で、学校現場での予防歯科指導実習が正規授業として継続している。	1 歯科検診、アンケート、歯磨き指導状況観察 2 アンケート、現場観察 3 現場観察	政治経済状況が大きく変化しない	
【プロジェクト目標】 ドンコイ小学校での予防歯科指導体制確立がモデルとなり、ボンババオ及びノンハイ小学校、地域住民等の関係者がより適切に予防歯科に取り組むようになる。 ※ プロジェクトが対象者に伝えたいメッセージ:「虫歯を適切に治療した上で、歯みがきによる予防歯科が必要である(予防歯科の正確な知識を認識して欲しい)」 ※ プロジェクトスローガン:「歯ブラシ一本から始まるお口の健康」	1 ドンコイ小学校での予防歯科関係者(校長、保健の先生、親、児童、セタティラート病院歯科医師、ラオス国立大学歯学部学生等)の予防歯科の必要性にかかる認識が高まり、歯の治療を行った児童のdmf(乳歯)・DMFT(永久歯)が3.0低下(維持)する。 2 ドンコイ小学校の学校歯科検診を行う開業医が1名確定する。 3 ボンババオ、ノンハイ小学校の関係者がドンコイ小学校の予防歯科指導体制の大切さを認識し、予防歯科に取り組む。 4 ラオス国立大学歯学部の実習で、学校現場での予防歯科指導実習が正規授業として承認される。	1 歯科検診、アンケート、歯磨き指導状況観察 2 歯科検診、アンケート、指導状況観察 3 報告書		
【成果】 1 ドンコイ小学校において歯磨きによる予防歯科指導の実施体制が確立され、児童のう蝕罹患率が低下する。	1-1 歯の治療を行った児童のdmf(乳歯)・DMFT(永久歯)が3.0低下(維持)する【児童の歯】。 定義 dmf:乳歯の1人平均う蝕数、DMFT:永久歯の1人平均う蝕数、dmf=d:decayed;未処置のう蝕、m:missing;う蝕を原因とする喪失歯、f:filled;う蝕のための処置歯、DMFT=DT(Decayed Teeth + Missing Teeth + Filled Teeth)それぞれ数え、その和で表す。 1-2 児童の歯のPCRが30%以下になる【児童のブラッシング状態】 1-3 保健の先生が予防歯科の必要性を理解し、児童たちに対し独自に適切な歯磨き指導ができるようになる。(アンケート結果と指導状況の観察により判断する)【保健の先生】 1-4 校長先生が学校歯科検診を含め予防歯科の必要性を理解する。(アンケート結果から判断する)【校長先生】 1-5 児童の親が予防歯科の必要性を理解する。(アンケート結果から判断する)【親】	1-1 歯科検診 1-2 歯科検診 1-3 アンケート、歯磨き指導状況観察 1-4 アンケート 1-5 アンケート		
2ボンババオ・ノンハイ小学校において、適切な歯の治療及び歯磨きによる予防歯科の必要性が認識され、適切に歯磨きが行われ、児童の歯のう蝕罹患率が悪化しない。	2-1 歯磨き指導を行った児童のdmf(乳歯)・DMFT(永久歯)が悪化しない。【児童の歯】 2-2 児童の歯のPCRが30%以下になる【児童のブラッシング状態】 2-3 保健の先生が予防歯科の必要性を理解し、児童たちに独自に適切な歯磨き指導ができるようになる。(アンケート結果と指導状況の観察により判断する)【保健の先生】 2-4 校長先生が学校歯科検診を含め予防歯科の必要性を理解する。(アンケート結果から判断する)【校長先生】 2-5 児童の親が予防歯科の必要性を理解する。(アンケート結果から判断する)【親】	2-1 歯科検診 2-2 歯科検診 2-3 アンケート、歯磨き指導状況観察 2-4 アンケート 2-5 アンケート		
3 セタティラート病院歯科医師による患者の健康管理方法が改善され、歯科医師間の連携も図られる。	3-1 セタティラート病院歯科医師が予防歯科指導の必要性を理解する。(アンケート結果から判断する) 3-2 患者のカルテが適切に作成され、管理される。 3-3 セタティラート病院歯科医及び開業医が参加する勉強会が年に1～2回開催される。 3-4 学校歯科検診が年に2回実施されるようになる。【プロジェクト実施中にドンコイ小担当の開業医を1名確定する】	3-1 アンケート 3-2 カルテの確認 3-3 報告書、勉強会の観察 3-4 報告書、歯科検診観察		
4 ラオス国立大学歯学部の実習内容が改善される。	4-1 実習期間中に、セタティラート病院と連携し、学校現場で歯学部学生の予防歯科指導実習が実施される。 4-2 学校現場での予防歯科指導実習が正規授業として承認される【教育省の許可が必要】。 4-3 ボランティア活動として自主的に歯科健診およびデンタルフェアに参加するようになる。	4-1 報告書、実習観察 4-2 報告書 4-3 報告書		
5 地域住民、特にデンタルフェアに来場した人の予防歯科の必要性にかかる認識が改善される。	5-1 デンタルフェア来場者の予防歯科の必要性に係る認識が高まる。(アンケート結果から判断する) 5-2 デンタルフェアの来場者が増加する。	5-1 アンケート 5-2 報告書		
【活動】	【投入】			
1-1 ドンコイ小学校において、児童の歯の治療を行う (1年目のみ) 1-2 児童一人一人(個別)に対する定期的な歯磨き指導を行う (活動開始期は週に1回から) 1-3 保健の先生への技術指導を行う(活動開始期は週に1回から) 1-4 3ヶ月に一度の定期健診を行う (日本専門家チーム+現地スタッフ(ボランティアの歯学部学生)による) 1-5 児童、教職員、父母に対する勉強会のための教材を開発(顎体模型、絵本(「むし歯の成り立ち」「お口の健康」「歯磨きの仕方」、等翻訳も含む)し、勉強会を開催する。 1-6 本邦研修(対象:校長先生、保健担当先生(予定)、内容:学校歯科検診、ブラッシング指導方法等)	現地側 (人材) ・セタティラート病院歯科スタッフ(6人) ラオス国立大学歯学部職員(若干名):実習担当者 ラオス国立大学歯学部学生(年間約50人)	日本側 (人材) ・プロジェクトマネージャー(仲宗根) ・本邦研修(年1回、計4名/3年間) ・専門家派遣(年2～3回、計10名) ・通訳(現地で雇用)		
2-1 児童(全体)に対する定期的な歯磨き指導を行う(活動開始期は週に1回から) 2-2 保健の先生への技術指導を行う(活動開始期は週に1回から) 2-3 3ヶ月に一度の定期健診を行う(日本専門家チーム+現地スタッフ(ボランティアの歯学部学生)による) 2-4 児童、教職員、父母に対する勉強会を行う。	(資機材、施設) ・各小学校(歯科検診) ・地域の会議場所(歯科予防勉強会)	(資機材) ・消毒のための薬液 ・歯科治療材料 ・歯ブラシ・歯磨剤		
3-1 本邦研修(対象:ラオス国立大学医学部長兼セタティラート病院長、歯学部長、内容:学校歯科検診、カルテ管理、開業医・専門病院視察等) 3-2 セタティラート病院歯科医師に対する技術指導を行う(年に2回、各3名を派遣:歯科検診手法、診療能力向上、歯科の組織化・機能化) 3-3 現地での事業報告、現状分析を行う(歯科スタッフ対象)(年1～2回) 3-4 セタティラート病院歯科医及び開業医対象の勉強会を開催する(年1～2回)	・歯科治療材料(セタティラート病院歯科) ・歯ブラシ ・歯科検診セット(ミラー、短針、ペンライト) ・グローブ、マスク	・専門家派遣(年2～3回、計10名) ・通訳(現地で雇用)		
4-1 10月から12月の3ヶ月間、歯学部学生の実習の一貫としてプロジェクトに参加してもらう(この時期を予防歯科月間と位置づける) 4-2 歯学部学生に対し、予防歯科に対する講義および実地指導を行う(日本専門家チーム+現地スタッフによる)				
5-1 住民対象の予防歯科勉強会デンタルフェアをセタティラート病院にて行う(事業報告、成果発表も含む)(年2回) 5-2 予防歯科に関連するポスターおよびガイドブックを配布し、予防歯科通信を発行する(3ヶ月に一度を目処)				【前提条件】

■終了時評価確認書和文署名

「ラオス国児童に対する歯磨き指導による口腔内清掃状態改善事業
(歯ブラシー本から始まるお口の健康)」
プロジェクトに係る合同終了時評価確認書

沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター（支援センター）、独立行政法人国際協力機構（JICA）で構成された日本の終了時評価調査団は、2011年2月16日から2月24日の間、「ラオス国児童に対する歯磨き指導による口腔内清掃状態改善事業（歯ブラシー本から始まるお口の健康）」（プロジェクト）の終了時評価を行うために、ラオス人民民主共和国（ラオス）を訪問した。

上記2者はプロジェクトのカウンターパート機関であるセタティラート病院歯科を加え、11名で合同終了時評価チームを組織した。

プロジェクト関係者は、課題点について議論し、付属書類についての合意形成を関係機関で行った。

2011年2月22日 ビエンチャン

高嶺 明彦

高嶺 明彦
ラオス口唇口蓋裂患者支援センター会長



Dr. Somphone PHANTHAVONG
プロジェクトマネージャー
セタティラート病院歯科部長



玉林 洋介

玉林 洋介
独立行政法人 国際協力機構
沖縄国際センター市民参加協力課長

■ 終了時評価確認書ラオス語文署名

「ໂຄງການປັບປຸງການອະນາໄມຜຶງປາກດ້ວຍການຊີ້ນຳຕູ(ພັດ)ແຂ້ວເດັກນັກຮຽນລາວ
(ການຮັກສາສຸຂະພາບຜຶງປາກເລີ່ມຈາກແປງຕູແຂ້ວໜຶ່ງອັນ)」
ເອກະສານຢັ້ງຢືນການປະເມີນຜົນຄັ້ງສຸດທ້າຍຂອງໂຄງການ

ທີມງານສຳຫຼວດ ແລະ ປະເມີນຜົນຄັ້ງສຸດທ້າຍ ປະກອບດ້ວຍສູນຊ່ວຍເຫຼືອ(ລິ້ງເສີມ)ຄົນສົບ
ແຫ່ວງໄອກິນະວະ-ລາວ(ສູນຊ່ວຍເຫຼືອ), ອົງການຮ່ວມມືສາກົນປະເທດຍີ່ປຸ່ນໄອກິນະວະ(ສູນ JICA
ໄອກິນະວະ) ໄດ້ມາປະຕິບັດໂຄງການທີ່ກ່າວມາຂ້າງເທິງແຕ່ວັນທີ 16 - 24 ກຸມພາ(2) 2011.


ສອງອົງການທີ່ກ່າວມາຂ້າງເທິງ ຮ່ວມກັບໂຮງໝໍເຊດຖາທິຣາດ, ພະແນກແຂ້ວຄາງໜ້າ ໃນ
ນາມເປັນຄູ່ຮ່ວມປະສານງານຝ່າຍລາວ ຮ່ວມກັບ ທີມງານຝ່າຍຍີ່ປຸ່ນທັງໝົດທີ່ເຂົ້າຮ່ວມຈາກພາກສ່ວນ
ຕ່າງໆມີ ຈຳນວນ 11 ທ່ານ.

ພາກສ່ວນກຸ່ວຂ້ອງທັງໝົດໄດ້ປຶກສາຫາລືກັນ ກຸ່ວກັບບັນຫາຕ່າງໆ ແລະ ໄດ້ຕົກລົງເປັນ
ເອກະພາບກັນຕາມເອກະສານຢັ້ງຢືນສະບັບນີ້.

22/02/2011, ວຽງຈັນ

高 嶺 明 孝

Dr. Akihiko TAKAMINE
ປະທານສູນຊ່ວຍເຫຼືອຄົນສົບແຫ່ວງ
ໄອກິນະວະ-ລາວ


ໂຮງໝໍ ເຊດຖາທິຣາດ
ພະແນກ ພິ່ນຕະແສດ

Dr. Somphone PHANTHAVONG
ຜູ້ບໍລິຫານໂຄງການຝ່າຍລາວ
ຫົວໜ້າພະແນກແຂ້ວຄາງໜ້າ,
ໂຮງໝໍເຊດຖາທິຣາດ
ຮອງພາກວິຊາທັນຕະກຳບູລະນະ, ຄທພ

玉 林 洋 介

Mr. Yosuke TAMABASHI
ອົງການ JICA
ຫົວໜ້າແຜນການແລະການຮ່ວມມືສາກົນ
ສູນ JICA ໄອກິນະວະ

終了時評価調査結果表（和文）

1 案件の概要	
国名：ラオス	案件名：ラオス国 児童に対する歯磨き指導による口腔内清掃状態改善事業（歯ブラシー本から始まるお口の健康）
分野：保健・医療	援助形態：草の根技術協力（支援型）
所轄部署： 沖縄国際センター	協力金額：10,000 千円 口唇口蓋裂患者支援センター自費負担金額：1,277 千円 他に顕微鏡 93 台、歯科治療ユニット 6 台、ノンハイ小学校への机・椅子 30 セット 琉球大学医学部からは研修医派遣費が負担されている（5 人）
協力期間	2008. 6. 17～ 2011. 3. 18
	【ラオス国側実施機関】 セタティラート病院歯科
	【日本国側協力機関】 沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター
他の関連協力：沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センターによる口唇口蓋裂患者に対する年 1～2 回（1 回 8 人程度）の無償手術（チャリティオペレーション）	
1-1 協力の背景と概要	
<p>沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター（沖縄歯科口腔外科学研究振興会）は、2001 年よりラオス口唇口蓋裂患者に対して無償手術を行ってきた。その際、患者の口腔内環境の劣悪さに驚かされ、ラオス国児童・生徒の口腔保健衛生活動の必要性を認識した。</p> <p>ラオス国はアジアの中で最も経済的に恵まれない国の一つであり、保健医療分野においても多くの課題を抱えている。国民の健康向上に直結する口腔衛生分野においても公的な歯科保健サービスが立ち遅れており、住民にとって適切な歯科保健指導を受ける機会は極度に制限されている。また、ラオス国においては学童期の児童に対する予防歯科及び歯科保健教育も確立しておらず、歯科医師相互の連携もないため予防歯科に対する動機付けすら行われていない。</p> <p>そこで、総合的な歯科保健を実施すること及び住民を含めた予防歯科の啓発を行う必要性から、歯科保健・予防歯科の分野に精通している沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター（沖縄歯科口腔外科学研究振興会）会員の歯科医師が行う組織力を活かした包括的な国際協力として、本案件が草の根協力支援型として採択、実施されることとなった。</p>	
1-2 協力内容	
(1) 上位目標	
ドンコイ小学校での予防歯科指導体制確立がモデルとなり、ビエンチャン市シサトナーク郡の小学校、ノンハイ小学校及び地域住民等の関係者がより適切に予防歯科に取り組むようになる。	
(2) プロジェクト目標	
ドンコイ小学校での予防歯科指導体制確立がモデルとなり、ポンパオ及びノンハイ小学校、地域住民等の関係者がより適切に予防歯科に取り組むようになる。	
※ プロジェクトが対象者に伝えたいメッセージ：「むし歯を適切に治療した上で、歯みがきによ	

る予防歯科が必要である（予防歯科の正確な知識を認識して欲しい）」

※ プロジェクトスローガン：「歯ブラシー本から始まるお口の健康」

（3）成果

- ① ドンコイ小学校において歯磨きによる予防歯科指導の実施体制が確立され、児童のう蝕罹患率が低下する。
- ② ポンパパオ・ノンハイ小学校において、適切な歯の治療及び歯磨きによる予防歯科の必要性が認識され、適切に歯磨きが行われ、児童の歯のう蝕罹患率が悪化しない。
- ③ セタティラート病院歯科医師による患者の健康管理方法が改善され、歯科医師間の連携も図られる。
- ④ ラオス国立大学歯学部の実習内容が改善される。
- ⑤ 地域住民、特にデンタルフェアに会場した人の予防歯科の必要性にかかる認識が改善される。

（4）投入

〈日本国側〉

（人材）

専門家派遣：専門家派遣：計 38 名 ※別添 2 参照

平成 20 年度 第一回：8 日間×5 名、第二回：7 日間×5 名

平成 21 年度 第三回：7 日間×5 名、第四回：7 日間×8 名

平成 22 年度 第五回：7 日間×7 名、第六回：9 日間×8 名

研修員受入：計 8 名 ※別添 2 参照

平成 20 年度：7 日間×1 名×1 回

Somphone PHANTHAVONG、セタティラート病院歯科部長

平成 21 年度：7 日間×4 名×1 回

Somphone PHANTHAVONG セタティラート病院歯科部長

Duangchane LUANGHARATH セタティラート病院歯科医師

Bountheo PHOMPANYA セタティラート病院歯科医師

Khamsouk SUPHANTHONG ドンコイ小学校校長

平成 22 年度：9 日間×3 名×1 回

Somphone PHANTHAVONG セタティラート病院歯科部長

Akao LYVONGSA ラオス国立健康科学大学歯学部副学部長

Phouphachanh SOMBOUAPHAN セタティラート病院歯科医師

（資機材、施設）

- ・ 歯科機材、歯科治療材料、薬剤
- ・ 歯ブラシ、歯磨剤

〈ラオス側〉

（人材）

- ・ セタティラート病院歯科スタッフ（セタスタッフ）（12 人）

<ul style="list-style-type: none"> ・ラオス国立健康科学大学歯学部職員実習担当者（1人） ・ラオス国立健康科学大学歯学部学生（年間約50人） <p>（資機材、施設）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各小学校（歯科検診） ・地域の会議場所（歯科予防勉強会） ・歯科検診セット（ミラー、探針、ペンライト） 		
2 評価調査団の概要		
調査者	<p>① 日本国側 （専門家）</p> <ul style="list-style-type: none"> ：高嶺 明彦 沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター会長 ：仲宗根敏幸 プロジェクトマネージャー ：澤田 茂樹 琉球大学大学院医学研究科特命助教 ：比嘉 里沙 プロジェクトコーディネーター <p>（合同終了時評価調査団）</p> <ul style="list-style-type: none"> ：玉林 洋介 総括 沖縄国際センター市民参加協力課長 ：佐久間愛弓 評価管理 沖縄国際センター市民参加協力調整員 <p>② ラオス国側</p> <ul style="list-style-type: none"> ：Somphone PHANTHAVONG プロジェクトマネージャー ：Akao LYVONGSA ラオス国立健康科学大学歯学部副学部長 ：Khamsouk SUPHANTHONG ドンコイ小学校校長 ：Thongsavanh PHONAPHONH プロジェクトコーディネーター ：Phouphachanh SOMBOUAPHAN セタティラート病院歯科医師 	
調査期間	平成23年2月16日～2月24日	評価種類：終了時評価
3 評価結果の概要		
<p>3-1 プロジェクト目標と成果（アウトプット）の達成状況</p> <p>プロジェクト目標：ドンコイ小学校での予防歯科指導体制確立がモデルとなり、ポンパオ及びノンハイ小学校、地域住民等の関係者がより適切に予防歯科に取り組むようになる。</p> <p>※ プロジェクトが対象者に伝えたいメッセージ：「むし歯を適切に治療した上で、歯みがきによる予防歯科が必要である（予防歯科の正確な知識を認識して欲しい）」</p> <p>※ プロジェクトスローガン：「歯ブラシー本から始まるお口の健康」</p> <p>指標1：ドンコイ小学校での予防歯科関係者（校長、保健の先生、親、児童、セタティラート病院歯科医師、ラオス国立健康科学大学歯学部学生等）の予防歯科の必要性にかかる認識が高まり、歯の治療を行った児童の dmf（乳歯）・DMFT（永久歯）が3.0低下（維持）する。</p> <p>達成状況：2008年5月よりプロジェクトが開始され、終了時2011年3月の約3年間に6回の検診と5回の歯科治療が行われた。さらに、本邦専門家派遣人数38人、沖縄研修派遣人数8人であった。第一回沖縄研修にはセタティラート病院歯科部長1人、第二回沖縄研修には、セタティラ</p>		

ート病院歯科部長 1 人、セタスタッフ 2 人、ドンコイ小学校校長 1 人、第三回沖縄研修にはセタティラート病院歯科部長 1 人、セタスタッフ 1 人、ラオス国立健康科学大学歯学部副学部長・助教授 1 人が沖縄での 1 週間の研修を行った。その結果、ドンコイ小学校では、二時間目の休み時間に全児童の歯磨き時間が設けられるようになり、先生方が積極的なブラッシング指導まで行えるようになった。その結果、第一回検診では、むし歯「0」が 10/133 人であり、むし歯有病者率が 92.5%であったが、第 5 回検診では、むし歯「0」が 62/156 人であり、むし歯有病者率が 60.3%となった。ドンコイ小学校 12 歳児のむし歯有病者率を日本における都道府県別むし歯有病者率で換算すると 5 位となる。(図 1 a. b) さらに、第一回検診時 dmf:6.1、DMFT:4.5 であったのが、第六回検診時 dmf:3.2、DMFT:1.7 と低下し、むし歯「0」が 38/102 であり、むし歯有病者率が 62.5%であった。(図 1 c)

指標 2: ドンコイ小学校の学校歯科検診を行う開業医が 1 名確定する。

達成状況: 現段階では、ラオスに歯科医師会、学校保健、学校歯科保健などはなく、歯科医師同士の横の連携も取れていないのが現状で、ドンコイ小学校での開業歯科医 1 名は確定できていない。

しかし、同校では、セタティラート病院歯科が歯科治療・歯科検診を担ってきており、そのセタスタッフの多くが開業歯科医院を経営しているか、開業歯科医院でアルバイトを行っており、近い将来学校歯科検診の歯科医を指名できる環境は整った。さらに、昨年、ラオス国立健康科学大学副学部長、セタティラート病院歯科部長らによる Dental Association が設立され、歯科医師同士の連携も取られつつある。

今後もセタスタッフによるドンコイ小学校の学校歯科検診の継続は確認された。行政も含めて発展して行けば、ドンコイ小学校のみならず、各学校に学校歯科医が配置されることが期待される。

指標 3: ポンパパオ、ノンハイ小学校の関係者がドンコイ小学校の予防歯科指導体制の大切さを認識し、予防歯科に取り組む。

達成状況: ポンパパオ、ノンハイ小学校においては、2009 年から 2011 年の 2 年間に歯科検診 4 回を含め、むし歯予防の勉強会、ドンコイ小学校の検診結果報告会を行っている。その結果、ポンパパオ、ノンハイ小学校においても、二時間目の休み時間に全児童の歯磨き時間が設けられるようになり、さらにドンコイ小学校の検診結果に負けないように競ってむし歯予防に取り組むようになった。また児童においては、自ら進んで歯科治療を行いう児童も出てきた。ポンパパオ、ノンハイ小学校校長先生を始め、先生方が積極的にブラッシング指導に参加するようになり、教員間での情報交換を行うようになった。

ポンパパオ小学校第一回検診結果では、むし歯「0」が 19/158 人であり、むし歯有病者率は 88.0%であったのが、第三回検診結果では、むし歯「0」が 15/145 人であり、むし歯有病者率は 89.7%であり若干上昇してはいるものの、維持されている。一方、ノンハイ小学校第一回検診結

果では、むし歯「0」が 14/117 人であり、むし歯有病者率は 88%であったのが、第三回検診結果では、むし歯「0」が 28/126 人であり、77.8%で低下していた。(図 2)

成果 (アウトプット)

成果 1: ドンコイ小学校において歯磨きによる予防歯科指導の実施体制が確立され、児童のう蝕罹患率が低下する。

指標:

1-1. 歯の治療を行った児童の dmf (乳歯)・DMFT (永久歯) が 3.0 低下 (維持) する。

達成状況: 第一回検診時 dmf:6.1、DMFT:4.5であったのが、第六回検診時 dmf:3.2、DMFT:1.7と低下していた。学年別むし歯有病者率を見ると、学年が上がるごとに低下している。つまり、治療を行った児童において、むし歯予防が継続され維持されていると考えられる。

1-2. 児童の歯の PCR が 30%以下になる。

達成状況: ドンコイ小学校では、PCR (プラークコントロールレコード) においては、6 回の検診及び TBI (ブラッシング指導) にて、第一回検診時 PCR:90%であったのが 38%となり、明らかに PCR の低下が認められた。(図 3)

1-3. 保健の先生が予防歯科の必要性を理解し、児童たちに対し独自に適切な歯磨き指導ができるようになる。

達成状況: 教員の歯科に対する知識や経験はほとんどなく、第一回検診時には、児童を誘導することしかできなかったが、第三回検診以降は、正規の保健の先生がいないため、教員が積極的に児童の TBI に参加し、個々の生徒に歯磨き指導を行うまでになっていた。また、ラオス教員に対するアンケート結果に関して、以前はむし歯に対して興味がなかったが約 4 割、少しは興味があったが約 3 割、非常に興味があったが 3 割であった。本プロジェクトを開始後は、興味ありが 3 割、非常に興味ありが 7 割と変化した。(図 4)

1-4. 校長先生が学校歯科検診を含め予防歯科の必要性を理解する。

達成状況: ラオスにおいては、もともと学校歯科検診のみならず学校保健制度が整っておらず、学校歯科検診もどう進めたらいいのか、予防歯科において何が重要か理解できていなかった。

第二回沖縄研修にて、琉球大学附属小学校の検診や 1 歳半・3 歳児検診の見学を行い、予防歯科において学校での教育や関わりのみならず、児童生徒の親の協力、意識改革が必要だということを理解した。2009 年 5 月 25 日付けの琉球新報に「日本では親が子供の予防歯科に強い関心を持っている。ラオスでもまず親の意識改革から始めたい」と述べている。また、学校歯科検診を含めた歯科検診予防歯科の必要性に関するアンケート結果は、本プロジェクト開始以前においても、必要を感じていたが、実際、本プロジェクト開始後は、さらに学校歯科検診の重要性を再認識した。(図 5)

1-5. 児童の親が予防歯科の必要性を理解する。

達成状況：ラオスにおける経済事情は苦しく、共働きの家族が多い。そのため、日常の生活を送るのに精一杯である。また、保護者の保健についての知識が乏しく、児童への配慮が欠けているのが現状である。

しかし、ドンコイ小学校第一回検診においては、保護者の参加が約 50 人あり、「むし歯のできかたから予防までの勉強会」に参加していた。これまで、家庭における歯磨きが、一日一回から一日二回、三回へと変わってきている。これまで、児童の歯の痛みで困ることが多かったが、最近ではあまり心配が無くなってきたと言っている。

未だ日本の様に親が仕上げ磨きを行う段階までは達していないことから、「むし歯のできかたから予防までの勉強会」に参加できない全ての保護者に対し、むし歯予防の大切さを理解してもらうために、「むし歯のでき方から予防まで」のリーフレットを作成し配布している。今後、むし歯予防に対する父母の役割の大きさを伝えていかなければならない。

成果 2：ポンパパオ・ノンハイ小学校において、適切な歯の治療及び歯磨きによる予防歯科の必要性が認識され、適切に歯磨きが行われ、児童の歯のう蝕罹患率が悪化しない。

指標：

2-1. 歯磨き指導を行った児童の dmf（乳歯）・DMFT（永久歯）が悪化しない。

達成状況：ポンパパオ小学校第一回検診結果、むし歯有病者率は 88.0%であったのが、第三回検診結果では、89.7%であり若干上昇してはいるものの、高学年では維持されている。一方、ノンハイ小学校第一回検診結果は、むし歯有病者率は 88.0%であったのが、第三回検診結果では、77.8%で低下していた。（図 1）

2-2. 児童の歯の PCR が 30%以下になる。

達成状況：ポンパパオ、ノンハイ小学校においても、二時間目の休み時間に全児童の歯磨き時間が設けられるようになり、ポンパパオ小学校では第一回検診時 PCR：85%であったのが 47%まで、ノンハイ小学校においては、第一回検診時 PCR：89%であったのが 42%まで、明らかに改善してきている。

2-3. 保健の先生が予防歯科の必要性を理解し、児童たちに独自に適切な歯磨き指導ができるようになる。

達成状況：第一回検診時には、児童を誘導することしかできなかったが、第 2 回検診以降は、教員 12 人が積極的に個々の生徒に合った歯磨き指導を行うまでになった。PCR の結果からも明らかである。